

広重の旅と名所絵⑥

「廣重武相名所旅絵日記」と広重の名所絵制作 江東区深川江戸資料館

相州（現在の神奈川県）の鎌倉、江の島、大山、箱根などは、江戸からの距離が近いことや江戸以前の歴史を有する場所として、江戸の人々にとって人気の行楽地でした。これらの名所について広重は数多くの作品を残しており、広重の絵を見てあこがれの名所に思いをはせた人々も多かったことでしょう。ここでは、広重自身が武相の名所を巡り、箱根まで旅をした時の旅絵日記を紹介します。

1. 「廣重武相名所旅絵日記」とは

「廣重武相名所旅絵日記」（以下「旅絵日記」）（鹿島出版会所蔵）は、広重がほか数人と箱根までを往復した旅について描いた作品です。いわゆる道中記や備忘録的なスケッチとは異なり、簡単な彩色のなされた、それ自体一つの作品と言えるような内容となっています。

これまで、この「旅絵日記」は、しばしば「武相名所手鑑」（以下「手鑑」）の下絵として取り上げられてきました。「手鑑」は武相の名所を描いた広重の肉筆画集で、蜂須賀家への献上か下命の作と考えられています。「旅絵日記」の旧蔵者は蜂須賀家近習役の武谷家であり、同家に伝わる日記等から、広重は、嘉永4年（1851）頃、武谷機子とその師である井上文雄ら4人で、箱根へ旅行したとされます。おそらく広重にとっては依頼された「手鑑」を制作するための旅行だったと思われる。

2. 「旅絵日記」にみる広重の旅程

「旅絵日記」での広重一行は、江戸高輪を出立したあと、東海道を神奈川、保土ヶ谷と進みます。保土ヶ谷付近で、東海道から分岐している金沢道に入り、金沢に出ます。その後は浦賀から三浦半島を海岸沿いに鎌倉、江の島へと巡り、最終目的地、箱根へ到着しています。箱根では、定番コースを一周し、帰路は東海道を選んでいきます。相模国の名所は、大山を除きほぼ網羅した形になります。

一行の旅の目的ははっきりしませんが、基本的には武相の名所を巡っており、名所巡りの旅だったと思われる。広重自身は「手鑑」制作のための旅行だったのでしょう。一方で、旅程を見ると、所謂名所地とは異なる浦賀や三

浦半島の各所にも足をのぼしていることが分かり、そのことはこの旅が単なる名所巡りではなかったのではとの憶測を生んだりもしました。

広重が「旅絵日記」という形で残した絵には、金沢八景や江の島などの名所だけでなく、道中のなにげない景色や休憩場面も含まれており、一般的な名所絵とは異なる趣の作品と言えます。

広重は、一口に名所絵と言っても、浮世絵をはじめ、肉筆画、名所案内図など様々な形で名所を描いています。またたとえ同じ対象を描いた場合でも、構図や描き込む事物などを変えることにより、全く違った雰囲気のある作品に仕上げられており、そこには広重の創造性、作画姿勢を見ることができます。そして「旅絵日記」も“旅絵日記”という手法による作品と考えることができるとおもわれます。

ここでは、単なる旅先のスケッチ、或いは「手鑑」の下絵としてではなく、一つの作品として「旅絵日記」をひもとき、広重の旅、そして名所絵制作について探ります。

3. 名所を描く

「旅絵日記」で描かれた武相の名所は、浮世絵にみられるような名所絵とは内容も作風も異なっています。江の島を例にみてみましょう。

「旅絵日記」中、江の島を描いた画は6図あります。その一つが「江のしま 正面の図」（図1）です。江の島の

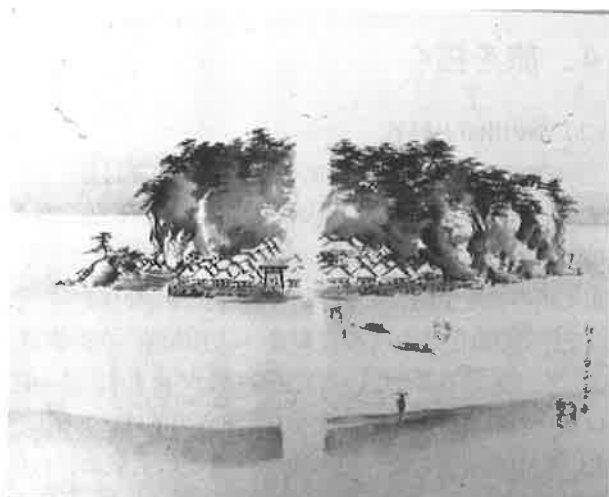


図1

正面を対岸から描いたもので、「満汐船渡」と書き込みがあります。

この絵に似た雰囲気のある作品として、柳下亭種員記・歌川広重画「江の島」『東海道風景図会』嘉永4年があげられます。これは東海道の宿場と名所を記した絵入りの名所案内記です。島と繋がる砂州を人々が歩いて行き来しているなど異なる点もありますが、全体的には「旅絵日記」と近似しています。

一方で、同じく江の島の正面を描きながらも、全く異なる趣の作品に「相州江之嶋弁才天開帳参詣群集之図」嘉永年間（1848～54）（図2）のような名所絵があります。こちらは、女性に人気の江の島を象徴するように、開帳に集まる4組の女性の講中を描いており、広重独自の臨場感のそなわった名所絵になっています。



図2

「旅絵日記」で描かれる名所は、江の島に限らず、デフォルメ的な要素は少なく、広重による説明的な書き込みが入るなど名所案内記に近い描き方がなされていると言えます。

こうしたいわゆる名所を描いた絵がある一方で、例えば、江の島であれば、宿坊での酒宴の様子や十三夜にお月見をする様子を描いた絵もあり、それがこの「旅絵日記」という作品の特徴になっています。次にこの点についてみてみましょう。

4. 旅を描く

(1) 旅の出立と帰着

「旅絵日記」は「発足 高輪通行之図」ではじまります。江戸時代、高輪は、東海道を旅する人々の送り迎えの場所でした。「旅絵日記」の冒頭で高輪を描くことで、東海道の旅を主題とする作品の印象が強くなります。そして日記の最後は「めて度江戸着 以上略図 立斎戯筆」として、「志がらき」という茶店を描いています。この店は現在の中央区銀座のあたりで広重宅のそばにありました。絵の雰囲気も描かれた場所も、いかにも旅の終わりという感じです。旅のはじまりと終わりを感ぜさせる絵を入れることで、一つの物語、一つの作品としての面が強

調されています。

(2) 旅中の休息と土地の人々

「田浦の里 農家に休足」（図3）のような、旅中で一行が休息する風景を描いた絵が入っているのも、「旅絵日記」の特徴です。こうした絵が入ることで旅情を感じさせる作品に仕上がっています。「手鑑」では、そのような旅の場面は作品化されていません。広重にとって名所絵の題材としては相応しくないが、絵としては、あるいは旅を表現する作品としては、採用しておきたいものだったのでしょうか。広重の名所絵観や、旅先における土地の人々へ関心の深さをうかがうことが出来ます。



図3

(3) 旧跡

「旅絵日記」には、事物の名称などが赤字で書き込まれた絵があります。また「鳥石海中出現」（図4）のような旧跡を描いた絵もあり、いずれも名所案内記に通じる視点が感じられます。これらは、広重が単に美しい景色のみをスケッチするのではなく、旅中における土地の歴史への関心の深さの表れと考えることもできるのではないのでしょうか。そして、これも結果的には旅を主題にした作品としてふさわしい内容になっていると言えます。

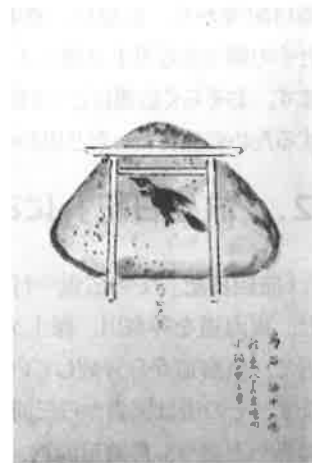


図4

「旅絵日記」には広重が名所絵として描くことのなかった事物や事柄も含まれており、旅の楽しみ方、旅先での関心事、名所絵観など、広重の名所絵制作に繋がる側面を読み取ることの出来る貴重な資料と言えるでしょう。